

笑顔と心をつなぐネットワーク はーとふる

HEARTFUL

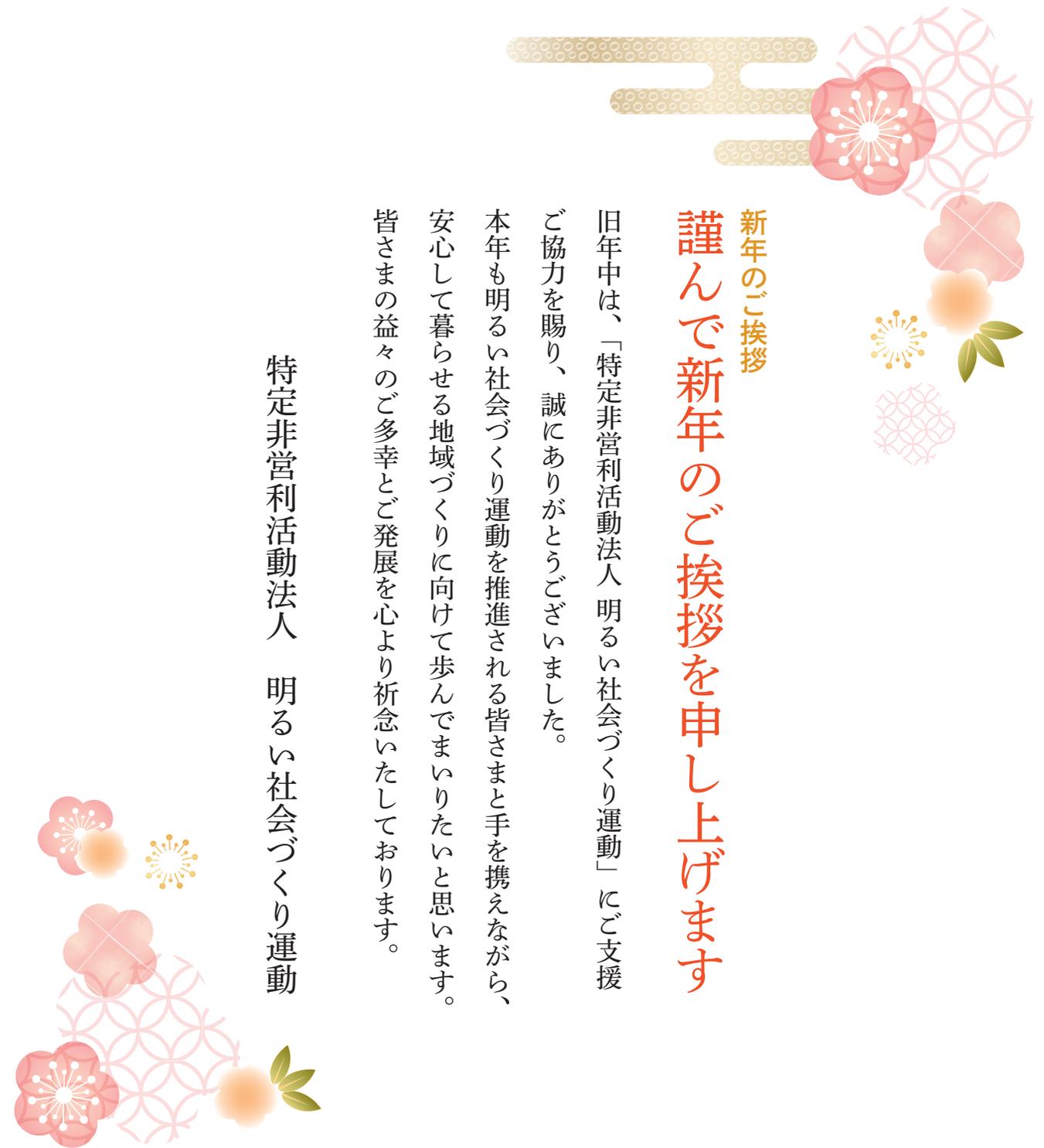
2025年
冬号

特集

集い、語り合う

——「明社推進連絡会」を開催





新年のご挨拶

謹んで新年のご挨拶を申し上げます

旧年中は、「特定非営利活動法人 明るい社会づくり運動」にご支援
ご協力を賜り、誠にありがとうございました。

本年も明るい社会づくり運動を推進される皆さまと手を携えながら、
安心して暮らせる地域づくりに向けて歩んでまいりたいと思います。
皆さまの益々のご多幸とご発展を心より祈念いたしております。

特定非営利活動法人 明るい社会づくり運動

Contents

はーとふる2025年 冬号

【目次】

	新年のご挨拶
1	…… 特集 集い、語り合う —— 「明社推進連絡会」を開催
14	…… Palネット
	掲示板
	耀！ 連隊 明社レンジャー



集い、語り合う

——「明社推進連絡会」を開催

「令和6年度 明社推進連絡会」（主催：特定非営利活動法人 明るい社会づくり運動）を2024年11月10日に開催し、全国から64人が参加しました。当日は、『私たちは、今、何が出来るか?』をテーマにパネルディスカッションが行われたほか、明るい社会づくり運動を推進する9団体の活動発表、グループ討議での活発な話し合いがあり、これからの明るい社会づくり運動の歩みを各人が確認しました。今号では、その様子をお伝えします。



私たちは、今、

何が出来るか？

『私たちは、今、何が出来るか？』をテーマに、明るい社会づくり運動を展開している団体から4人が登壇し、パネルディスカッションを行いました。それぞれの活動内容や運営面、資金面の工夫などを発表し、互いの見聞を広めました。その内容を紹介します。

鈴木 本日は、全国のみなさまのお話を聞かせていただき、学ばせていただくと思っております。まず、それぞれの活動を紹介してください。

政二 「NPO法人練馬明るい社会づくりの会」は、「親睦と協働」を合言葉に、みんなと仲良く楽しく活動していこうと、1984年にボランティア団体として発足しました。2012年にNPO法人格を取得し、現在、東京・練馬区民の善意を結集し、思いやりの活動を通して、誰もが生きがいをもって平和で住みよい明るい社会づくりに寄与することを目的に活動をしています。

ここに至るまでには40年かかりましたが、「連携」を一つの大きなテーマとし、他団体と連携しながら目標を達成できるような活動をしていきたいと思っています。

パネリスト

政二 潔 (東京・NPO法人練馬明るい社会づくりの会事務局長)

西江 行雄 (東京・NPO法人練馬明るい社会づくりの会常務理事)

木下百合子 (広島・明るい社会づくり運動広島市中区協議会前事務局長)

安田佳代子 (長崎・大村明社会事務局長)

モデレーター

鈴木 祥高 (特定非営利活動法人明るい社会づくり運動理事)

鈴木 具体的にはどのような活動を実施しているのですか。

政二 街づくりを目的に「練馬ファミリーまつり」を開催しています。2024年で25回を数えました。模擬店を30〜40店出し、子ども向けにミニSLを走らせたり、ミニ動物園を開設したりしました。また、みなさんから寄せられた物品をバザーで販売しています。まつりの収益金は東京都や練馬区の緑化基金、能登半島地震の義援金に寄付し、2023年と24年のバザーの収益金全額をウクライナ支援に充てさせていただきました。

また、都立光が丘公園内の下枝落としを年数回、実施していますが、これは火災の延焼を防ぎ、公園を使う人の安全につながるという事で始めました。このほか、事務所の1階で「お宝市」という名称のりサイクルショップを運営しています。「必要ないけれど、まだ使える



政二 潔さん

ものを再利用しよう」と
始めました。

鈴木 多岐にわたって、
かなり密度の濃い活動を
展開されているようです
ね。それでは、「明るい
社会づくり運動広島市中
区協議会」の木下さん、
お願いします。

木下 私たちは「うつく
しの杜^もりども食堂」を

2018年8月に開設しました。貧困家庭に限らず、来てくださるお子さんや地域のみなさんと、安心して楽しく食事をして語り合える居場所づくりを目指しています。毎月1回、第4木曜日の16時から18時30分まで、広島市中区にある廣瀬神社の社務所をお借りして始めました。初回は4人でしたが、今では30〜40人が参加しています。場所を探すのに苦労しましたが、宮司さんにご理解をいただき、社務所を提供していただけることに感謝しています。

鈴木 運営費はどのようにされているのでしょうか？

木下 小学生以下は無料、中学生以上は1食200円を負担してもらっています。広島市社会福祉協議会が何かと相談に応じてくださり、支援金を2度ほどいただきました。その後、地元にある公益財団法人マツダ財団の助成金制度に応募し、2022年、23年と続けて支援をいただきました。米、野菜、菓子など食材を提供してくださる方もいます。

財政的には不安定ではありますが、限られた予算の中で、どうす

れば皆さんにおいしい食事を提供して喜んでもらえるかを考えて頑張っています。多くの方々に支えられて活動ができることは大変ありがたいですね。

鈴木 父兄や子どもさんたちとのふれあひも大切にしているんですね。
木下 当初、スタッフは明るい社会づくり運動のメンバーだけでしたが、コロナ禍が過ぎて会食を再開すると、社会福祉専門学校の先生と生徒が見学に来られ、その後、学生ボランティアがスタッフとして参加してくれるようになりました。また、地域の人も加わってくださっています。

鈴木 子ども食堂にお子さんを迎えるにあたって、どんなことに心を砕いていますか。

木下 献立は寄付していただく野菜を中心に考え、食べやすいように心がけています。また、日本の食文化の大切さを子どもたちに伝えていきたいと思い、3月や9月のお彼岸には、手作りのおはぎと手紙を添えて渡しています。すると、子どもたちが、「おばちゃん、お彼岸って何？」と尋ねてくれて会話が弾みます。

鈴木 続きまして「大村明社会」の安田さんに活動を紹介していただきます。

安田 私たちは2017年に発足しました。主な活動は、月1回の沿岸清掃です。流れ着いた木切れなどを拾って処分して



安田 佳代子さん

います。その沿岸は「ガラスの砂浜」と呼ばれていて、もともと長崎県が大村湾の自然環境を取り戻そうと、アサリなどの生き物が生息できるように廃ガラスを加工した再生砂を用いて造成した浅場です。以前は、海藻や木切れなどが積み重なって、腐敗した臭いが漂っていました。

発足するにあたり会費は徴収せずに取り組んでいくつもりでしたが、市のボランティアセンターに登録するには「ボランティア保険」への加入が必要だと分かり、500円の会費を徴収することになりました。

鈴木 用具は皆さんの自前ですか？

安田 漂流する木とか海藻はたくさん砂を含んでいて、そのままゴミ処理場には出せないの、ふるいで砂を払い落とす必要があります。また、太くて大きな流木をのこぎりで短く切る作業もあります。会費だけでは用具を買いそろえることはできませんでしたが、発足した翌年、ボランティア活動助成金をいただくことができ、さらに3年後には、一般財団法人セブンイレブン記念財団の助成を受けてチェーンソーを購入できました。

私たちは「お金」も「物」も持たない団体でしたが、今では掃除用具がそろい、他のボランティア団体が清掃する時にお貸ししています。**鈴木** すごいですね。助成申請もされているんですね。練馬明社はNPOの法人格を取得されていますが、どのようなきっかけで法人格を取られたのですか。

政二 会が発足して41年になります。現在の会長が5代目ですが、3代目の会長が東京都庁で局長を務めていたことから、いろんな経験を踏まえて提案してくれて申請したわけです。

鈴木 法人格を取得するための書類提出など大変だったのではないのでしょうか。

西江 申請書類は、テキ

ストに沿って作成しました。2024年の3月には、「練馬明るい社会づくりの会」という名称が長いので、呼称を「練馬明社」とすることなどを盛り込みました。また、若い世代や地域のひとと一緒にやっていくために内容を再検討し、変更しました。NPO法人は、そうしたことを所轄庁に届け出ることが義務づけられていますね。

鈴木 地域の方を巻き込んだ活動を展開していくには、NPO法人化することで認知度や信頼度を高める必要がありますね。自主自立的活動を展開していくには、資金面も大きな課題だと思います。「お宝市」を始めたのは、そうしたことが理由だったのででしょうか。

政二 「お宝市」は、事務所の家賃を捻出する必要があったので始めました。家賃は他の物件と比べると格安なのかもしれませんが、やはり収益を考えないと活動を展開できません。NPO法人法には、「事業をしてもよい」という項目があります。そこで考えたのが、リユース品の販売でした。瀬戸物や衣服、アクセサリなどを販売しています。実際の収益は微々たるものですが、それでも年間40万円ほどの収益になります。それを少しでも還元しようと取り組んでいるところです。

鈴木 誰かの不用品が誰かの必要な物になり、役立っている。そして、練馬明社を運営していく力にもなっているんですね。「お宝市」に専



西江 行雄さん



門のスタッフはいらっしゃるのですか。

政二 だれとでもすぐに親しくなれるスタッフが常駐してくれているので安心です。

当初は商品を提供してくださる方が少なかったのですが、その人が店長を務めて、いろいろな方と知り合いになってくれたことで提供品が増えました。利用者も、地元や区内だけでなく、近隣の杉並区や中野区からも来てくださるようになりました。

鈴木 もう一つお聞きしたいのは、公園の下枝落とします。他団体や行政と連携しないと、なかなか公共の場の環境美化につながらないと思いますが、どのように関係を築いたのでしょうか。

政二 公園の管理者との信頼関係だと思います。また、広大な公園なので、私たちの団体だけでは間に合わず、植物の世話をしている近隣の住民に「一緒にやりませんか」と声を掛け、一緒に取り組むことになりました。公園のすぐそばにある光が丘警察署からも毎回4、5人が手伝いに来てくださいますね。

こうした活動を知らせるポスターを公園内に張り出すことで、見た方が一緒に活動してくれます。

鈴木 自分たちの活動を皆さんに知っていただくことも大切ですね。大村明社では、ボランティア募集や活動内容のPRをされていますか。
安田 大村市にボランティア登録団体の一覧があるんです。そこに名前を載せてもらっています。

また、年に4回、市のボランティアセンターが発行している通信に「ボランティア募集」を載せてもらい、それを見た方や学生が参加してくださいます。他にも学童からの受け入れや他団体とのコラボの依頼もあります。大村市主催で年2回行われる「大村湾一斉清掃」では、私たちが清掃している場所を一斉清掃の実施場所に入れていただくよ



木下 百合子さん

うになりました。

鈴木 海岸の漂着物はどのように処理しているのでしょうか。

安田 市がゴミ袋を支給してくれて、それに入れて、近くにある「環境センター」(ゴミ処理場)に持ち込んでいます。処理料は無料にしています。

鈴木 活動を継続されているので、行政側の理解もあるのでしょうか。地域との関係というところ「うつくしの杜子ども食堂」のみなさんいろいろなご苦労があったのではないかと思います。木下さん、その点はいかがですか。

木下 廣瀬神社の社務所を使わせていただいているので、学校区の校長先生や町内会長さん、児童館へ挨拶にうかがっています。ポスターも作りましたが、掲示することに難色を示されていました。ようやく児童館には、1年間、張らせていただけたんですね。しかし、チラシの配布はできず、結局、口コミで広がっていききました。

鈴木 口コミで広がっていくというのはすごいですね。

木下 そうですね。はじめはスタッフも明るい社会づくり運動のメンバーだけでしたが、口コミで知り合いから知り合いに伝わって手伝いに来てくれるようになりました。

献立は、お店を出していた料理長さんが作成し、開催日は料理長さん指揮のもと、スタッフがそれぞれの担当で力を発揮しています。子

どもたちが喜ぶ料理を考えてくださるのでみんな楽しみにしています。そのためにも、毎月、振り返りと次の月はどうするかを話し合う会議を開いています。

鈴木 話は変わりますが、世界中が新型コロナウイルスの影響を受けてさまざまな動きが止まった時間がありました。その中でどのようなことに注意しましたか。大村明社はコロナ禍でも活動を継続されたそうですが、どのような思いで取り組んだのかお聞かせください。

安田 「密」にならないことが基本でした。幸いにも私たちの活動は沿岸清掃ですので風通しがとても良いんですね(笑)。掃除するときは、各々がそれぞれの場所でするようにしました。集まった人が少人数でも止めることなく続けてきました。

鈴木 子ども食堂はどのような形で続けていたのでしょうか。

木下 コロナ禍では、会食ではなく、お弁当の持ち帰りにしました。また、持ち帰りの際も、「受け取りに来るときは一人で」とお伝えしました。お弁当は、多いときで60〜70食ほどを作りましたね。

鈴木 練馬明社さんはコロナ禍の動きはどうでしたか。

政二 「練馬ファミリーまつり」は土日の開催で、例年3万から4万人が集まっていました。ですから、やはりコロナ禍では開催することができませんでした。コロナ禍の3年間は、スタッフがZoomミーティングをし、活動の継続を考えていました。

鈴木 3年間活動をお休みしてアフターコロナでリスタートしたわけですね。活動を継続していくうえで大事になってくるのは人材だと思いますが、新たな人材をどう巻き込んでいったらよいのか。大村明社では、お父さんがしてきた活動を娘さんの安田事務局長が引き継いで世代交代を図っているとのことですが、その気持ちを聞かせていただければと思います。



鈴木 祥高さん

安田 世代交代という意識はなくて、父が始めたんだから一緒にやるしかないかなということで、自然と一緒にやっています(笑)。
鈴木 安田さんはお父さんの背中を見ながら「良い活動をしている」と感じていたのではないのでしょうか。家族が一緒に参加することで、次を担う人を育成していくということが考えられますね。他のみなさんはいかがですか。

政二 活動の中心になるのは、その会の理事会です。そして、団体を支える正会員や賛助会員がいて、現在、練馬では600人ほどの会員がいます。当初は、その方々の意見を聴取しながら運営していました。が、それではなかなか動けないという状況がありました。それで、昨年40人ほどの正会員とそれをサポートする会員という形の定款(ていかん)に変更しました。

木下 子ども食堂の対象者は、まだ小さいお子さんです。この子たちが、子ども食堂の大切さを理解してくれて、将来、運営に携わってくれたらうれしいですね。

鈴木 今は小さいお子さんでも、ゆくゆくは中学生、高校生になります。「昔、子ども食堂でおいしい食事を提供してもらったから、今度は、僕が、提供する側に回りたい」という流れが出てくるとよいですね。
木下 現在、参画してくださっているスタッフに

加え、興味や関心のある方に、少しの時間でもかかわっていただきたいと思っています。例えば、会場の準備をする、料理をする、作ったものを並べるなど、部門ごとに分けて、都合のつく時間に来ていただき、参画していただくのです。お勤め帰りの方には片付けを手伝っていただくとか……。私たちは今、そのような試みを始めているところです。

鈴木 大村明社では、若い方が清掃の手伝いに来てくださっているようです。……。

安田 普段は月1回、平日の第2水曜に行っていますので、若い方は参加しづらいと思います。でも、夏休み期間中は、ボランティアセンターを通して参加くださる学生たちがあります。

鈴木 高校生や大学生も、ボランティアに参加してみると、「人さまのために」という気持ちを抱くのではないのでしょうか。

本日のパネリストのみなさまは、とても生き生きとしているのが印象的でした。3団体で共通していることは、まず、自分自身にできることをしている点です。二つ目は、今いる仲間を大切にしています。三つ目は、行政との連携をきちんと考えている点です。自主自立の活動を考えるうえで、運営資金の問題もあります。そこもしっかりクリアしていきけるような独立性をもった活動を展開することの大切さを教えていただきました。

また、地域の中に溶け込んでいくことや新しいことに一歩踏み出すときには、大変な労力があつたのではないかと思いますが、それは結局のところ自分自身の人生をより豊かにしていくことに繋がっていくのだと思います。

以上でパネルディスカッションを終了いたします。みなさまありがとうございました。

活動発表

— 9団体の取り組み

▼ 明るい社会づくり運動福井県連絡協議会



神浦 正昭さん

福井県連絡協議会の15団体は福井市を中心に、SDGsの取り組みとして、過去には「ラオスに井戸を贈る運動」を、そして現在は、アフリカへ木を送る「一緑運動」を支援するため、未使用のハガキの収集を呼びかけています。これまで累計で

1万1276枚を集めました。

このほか、行政（主に福井県）と協働で、産業廃棄物の不法投棄のゴミ処理も行っています。

福井市西部の山間部には、林業や観光業などを促進する目的で約30年前に幹線道路や山道が造られました。その道路下20〜30メートルの河川に、テレビや洗濯機、冷蔵庫などが投棄されて、今はゴミ捨て場と化しています。近隣住民からの苦情が絶えず、その声を地元区長と協働で、福井県環境安全部に陳情させていただきました。こうした問題の解決には、やはり行政との信頼関係をつくり、手を携えて取り組まなければならぬと思っています。

また、福井市内の一級河川には、プラスチックゴミが流れてきます。他団体と協働して福井市の明社総出で、20数年間プラゴミ回収をして

います。さらに、発足した当時からこれまで40数年間、足羽山公園の清掃を継続してきました。夏になると生い茂った草木の刈り取りをしており、この作業には大変な費用がかかるのとことで、奉仕によって行政の方々に喜んでいただいています。

「花いっぱい運動」では、市内6カ所の公園に花を植えています。

私どもの資金で苗を買うなど、年間を通してすべてを管理しています。おかげさまで、福井市がボランティア活動の窓口を作ってください、私どもの活動をPRしていただけるようになりました。

それからJRF福井駅前で共同募金会の街頭募金を福井県と一緒にしています。毎年、50万円ほどの浄財を寄付させていただきます。



▼ 北区明るい社会づくりの会



有賀 榮一さん

私たちは募金活動をはじめ、いろいろな活動を実施していますが、本日は「北区雑学大学」の運営について話します。

「北区雑学大学」は、2003年3月に始まり、24年で21年目になりました。創設者は「北区明るい社会づくりの会」3代会長

で早稲田大学第13代総長を務めていた小宇宙丸先生です。現在の「北区雑学大学」の学長は、早稲田大学名誉教授で明社理事の伊藤洋先生

です。

講師はどなたでも自由、聴衆も聞きたいテーマで参加自由。テーマも千差万別。北区に生涯教育の花を咲かせようということで毎月1回(当初は月2回)、取り組んできました。

「北区雑学大学」の特長には、「講師料はタダ」「参加費もタダ」「室料、会場費もタダ」という「三タダ」があります。

北区文化振興財団が後援しており、そのおかげで北区の広報に毎回案内を出してもらえるので、その案内を見て毎回20〜30人ほどの区民が来てくれています。

雑学大学の「三タダ」、自由な運営は、あらゆる人々の活躍の推進と、生涯教育の観点から人間形成に結び付く学習環境を展開していくという点で、SDGsにつながっていると思います。

当初の会場は、田端文士村記念館でしたが、2015年からは区立王子小学校王子ホールで開催しております。ですから、区の支援で室料無料です。第1回の授業では、小山先生が『北区と私』というテーマで講演しました。

主なテーマは、趣味とか健康、生活、歴史、SDGsなど。例えば、健康のテーマでは、『病氣と賢く付き合う方法』『糖尿病とどう付き合うか』『寿命を延ばす秘訣』『認知症予防は生活習慣から』……。SDGsのテーマですと、『SDGsからみる幸せのかたち』『女性の大学教



育の確立と男女平等』『エコロジー』『夢をあきらめない全盲マラソンランナーの挑戦』などがありました。質疑応答も活発に行われています。

東京明るい社会づくり運動区部協議会



川本 恭央さん

東京明るい社会づくり運動区部協議会で、東京23区の各明社が月1回集まって話し合いを重ね、年1回行われる会長会で、その中間報告を上申しております。

新宿、渋谷、港の各区明社が、正直に言っている動いていない状況でしたので、どうしたら良いかという話し合いをさせていただきました。2023年10月の区部協議会でワーキンググループを作ることになり、話し合いを継続しています。全く強制力はないのですが、区部協議会に提案するかたちになっております。2024年は各区明社にアンケートを取り、ヒアリング、報告書、ワーキンググループの提案をまとめ、冊子を作らせていただきました。

この中で、長い間、事業を行ってはいっても、実は会員が増えておらず、高齢の活動会員に仕事が集まっているという実態が分かりました。会費は平均1041円ですが、課題は、コロナ禍の3、4年間は会費を集められなかったことです。しかし、新宿明社でのヒアリングでは、協力団体である佼成会の行事の時に「明社」の机を出し、そこで明社のスタッフが会費を徴収しているというお話を聞きました。

以上のような内容を踏まえ、ワーキンググループからの提案です。急激な人口減少に伴い、明社の会員が減っています。独り暮らしの方、その中でも、弔う人がいない方、遺骨の引き取り手がいない方もいま

す。社会が家族になっていかなないと日本は立ちいかなくとも思いま
す。「明社家族」になっていくことが大事です。

人として信頼と友情を築くことに目標があると提唱者はおっしゃっ
ています。最終目的はこのつながりを大切にして、血縁のある家族で
なくても、明社家族としてつなげていきたいと思っております。

▼NPO法人富士明るい社会づくりの会

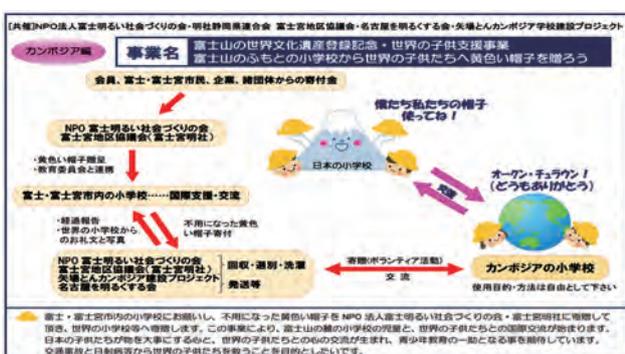


高木 義真さん

当会の主な活動に、新入学児童に黄色い帽子の贈呈があります。この活動は
2025年で50周年を迎えますが、今まで
約15万個の黄色い帽子を地元の小学生にか
ぶっていたいただいています。

しかし、

黄色い帽子をかぶるのは低学年まで
で、高学年になると野球帽をかぶる
子どもも少なくありません。そこで、使
わなくなった黄色い帽子を回収し、
再度、子どもの明社で有効活用しよ
うということになり、名古屋を明る
くする会の会員である、みそカツで
有名な「矢場とん」が運営する「矢
場とん建設プロジェクト」と連携し、
回収した黄色い帽子をカンボジアの
子どもたちに差し上げる取り組みを
始めたのです。



現在、富士明社、富士宮明社、名古屋を明るくする会、矢場とんカ
ンボジア建設プロジェクトの4団体共催で、「富士山のふもとの小学
校から世界の子どもたちへ黄色い帽子を贈ろう」というテーマで行っ
ている「国際事業」です。

矢場とんは、10年間で5つの学校をカンボジアに建設し、その生
徒に黄色い帽子を届けてきています。コロナ禍で飛行機の運航がな
かったこともあり、事業は3年ほど停滞しましたが、2024年は第
1回目500個、2回目には320個を贈ることができました。今
後も4団体で継続していきたいと思っております。

▼明るい社会づくり運動福島県連絡協議会



馬場 弘至さん

私も現在は現在、11地区の協議会と県連絡
協議会で明るい社会づくり運動を展開して
います。具体的には、新入学児童に黄色い
帽子を贈る活動をはじめ、チャリティーバ
ザー、オーケストラ演奏会、学校訪問指導、
さらには県民大会、献血、国道清掃などを
展開してきました。県レベルでの人材育成講座も開催しましたが、私
もその受講生の一人です。

メインは、「明るい社会づくり作文コンクール」。子どもたちの家族、
友人、社会を思いやる心を育てて、明るい社会をつくることを目的に、
1988年から始まり2024年で37回を迎えました。福島県ではこ
の間、東日本大震災と原発事故、そして新型コロナウイルス感染症な
ど数々の困難がありました。多くの方のおかげさまで、休まず継続
することができました。



作文を通してこれまで15万人超の子どもたちに明るい社会づくりを考えるきっかけを作ったといえると思います。作文コンクールという全県の活動があったことにより、各地区協議会とつながり、結果として各地区の活動の発展、継続につながった効果もあったと思います。

関係者の高齢化が深刻な課題ではありますが、2024年にはうれしいことがあります。パリでのパラリンピックの車いすラグビーで金メダルを獲得した選手の中に、福島県三春町出身の橋本勝也選手がいました。10月25日に福島県知事から県民栄誉賞が授与され、橋本選手は5人目の受賞者となりました。

橋本選手が中学2年生の時に、明るい社会づくり作文コンクールに応募し、「知事賞」を受賞していたことが分かり、8年前に作文の審査員をした先生が当時のことを教えてくださいました。

それは、橋本選手の通う中学校に知事賞の受賞を連絡したところ、担任の先生が「橋本君はこれまで自分の人生を振り返ることはなかったけれど、この作文を書く機会をいただいて振り返ることができた。これからは自分に自信を持ってスポーツで頑張りたい」と話していた」という

ことでした。

長年、地道に取り組んできた活動が、ある一人の生徒の人生を大きく前向きに切り替えるきっかけとなったことは、何よりうれしいことでした。子どもたちの健やかな成長につながっていることが本当にありがたく、とても励みになりました。子どもたちの作文を読むと、世の中の変化を感じる一方、時代が変わっても、子どもたちの素直さ、家族を思う気持ちは変わらないと感じています。

明るい社会づくり運動富山県協議会



成瀬 宜史さん

明るい社会づくり運動富山県協議会は、氷見、砺波、高岡の三つの地区明社で構成されています。氷見明社は、文化的な活動を通して市民、他団体と交流し、砺波明社は家庭教育を実施。高岡明社は、海のプラスチックゴミを減らし、生き物を守るための啓発を行っています。

ここでは、高岡明社について説明させていただきます。高岡明社は1971年に発足し、会員は協力団体を含めて400人です。2021年にSDGsについて学び、富山県SDGs宣言に参加。それと高岡SDGsパートナーに登録させていただきました。具体的には「100万人のゴミ拾い」を中心とした海岸清掃、プラスチックゴミを減らす工夫と習慣づくりのための啓発活動を行っています。

2024年の元日に発生した能登半島地震によって、富山県内でも甚大な災害を被りました。そのため、「100万人のゴミ拾い」などの事業を断念しましたが、7月の海開きに高岡市が計画した特別海岸

清掃には、高岡明社も参加しました。一般市民も含めて総勢1千人以上が参加し、その中で、市民にマイクロプラスチック回収を呼びかけたほか、網を作成して高岡市に提供しました。

また、ポイ捨て禁止を呼びかけております。高岡市内の中学校、高校で啓発ポスターを募って優秀作品を表彰し、さらに、市内の公共施設にポスターを展示して市民に見ていただいております。2024年は表彰式と合わせて、



「一般社団法人環境市民プラットフォームとやま」の堺勇人事務局長にSDGsについて講演をしていただき、子どもたちの知識を深めることができました。そして、高岡市の協力を得てポスターをチラシ化し、それを高岡駅構内で通勤通学者に配布して啓発しております。子どもは地域の皆さんと共にこれからも地道に活動を進めてまいります。

名古屋を明るくする会



中田 義人さん

名古屋を明るくする会は、1985年に発足し、2024年で39年になります。いくつかの活動を展開していますが、その中から37回目を迎えた「明るい社会づくり実践体験文発表会」についてお話しします。

毎年、年度末（3月）に活動がスタートします。名古屋市、名古屋市教育委員会、名古屋市の小中学校校長会、及び、中日新聞社や三菱UFJ銀行など地元企業（6社）に後援を依頼します。そして、5月上旬から各学校へ訪問し、作文募集の案内をします。7月末までに応募された作品に対し、8月下旬に第一次審査を会員の皆さまに、また、8月末に最終審査を「名古屋を明るくする会」の理事の皆さんにさせていただきます。そして、受賞者への通知と「表彰式」出欠の確認、さらに、受賞作文の文集作成の手配をし、10月末に名古屋市教育センターで実践体験文発表会を実施します。

「名古屋を明るくする会」には、25の地区があります。各地区の推進委員は、会員の皆さまの協力もいただき、各地区で10数校ずつ訪問し、全体で小学校が267校、中学校が127校の合計394校を回ります。小学生には原稿用紙3枚、中学生は5枚程度の作文をお願いしております。8月下旬の一次審査では、2日間で延べ120名以上の各地区会員の皆さまに、約700編の作文の審査をしていただきます。審査を通じて、作文を読ませていただくと、子どもたちは純粋で素直で、こちらが恥ずかしくなる程ですし、「自分たちの今の生き方を反省しなければいけない」と考えさせられます。



「実践体験文発表会」を通じて、他を思いやる心、善意の心が少しでも子どもたちに広がるようにと願っています。子どもたちが同世代の子の作文にふれて、「こんなことができたらいいな」と感じたり、親子で「作文のこういう内容がすごかったね」と会話ができたりすれば、少しでも明るい名古屋に繋がっていくのではないのでしょうか。

▼明るい社会づくり運動もりおか



藤川 智美さん

私たちは、北上川清掃に取り組んでいます。北上川は岩手県北を水源として、南下して宮城県石巻市で太平洋に流れ込む、全長249kmと日本で4番目に長い、東北では随一の河川です。

雪解けの頃になりますと水量が上がって、上流から一斉にゴミが流れてきます。それが4月下旬になると水位が下がり、河川敷はゴミ捨て場と化してしまうのです。空き缶、空き瓶、ペットボトルや古タイヤ、紙、自転車などで河川敷は埋め尽くされています。近隣の町内会の人や周辺に住んでいる方々が一緒に清掃をするようになり、だんだんと参加する団体が増えてきました。

集めたゴミの処理は、以前は建設省でしたが、今は国土交通省河川局の出先機関がしてくれるようになりました。

私たちの活動のもう一つは、回収した古紙をスーパーマーケットでポイントに換えて、さらに食品に換えて、子ども食堂に寄付することです。今、食にありつけない人たちがどんどん増えており、日本ではそうした格差が広がっています。子ども食堂についてはもっと取り組まなければならぬと思っています。

▼水戸ブロック明るい社会づくり協議会



富岡 哲夫さん

水戸ブロック明るい社会づくり協議会は、水戸市、茨城県、城里町の3つの自治体を包括しております。定例総会、灯籠流し、ポスターコンクール、100万人のゴミ拾い、地域行事への参加という5つの活動を主に行っております。今日は「明るい社会づくり運動ポスターコンクール」について発表いたします。

コンクールは1996年から毎年1回行われ、2024年で第27回となりました。水戸市、茨城県、城里町の公立小学校の6年生に、小学生時代の記念ということで冬休み期間中に書いていただきます。テーマは『思いやりの心を大切に』『命を大切に』『地球環境を大切に』という3つから一つ選びます。審査会で入賞作品が選ばれ、その中から金賞、銀賞、銅賞が決められ、さらに金賞の中から「明社会長賞」「教育委員長賞」「実行委員長賞」の特別賞が選ばれます。また、特別賞を受賞した作品の児童には、表彰式で400字位の作文を発表していただいています。展示会は、水戸市の市民センター、茨城町のゆうゆう館、城里町のコミュニティセンターで開催されます。ぜひ、会場で見てくださいと思います。

